開卷驚奇俠客傳 第三集 壹

東43
1245
11

曲亭翁手輯

開卷驚奇

俠客傳第三集

歌川國貞畫

甲午孟陽有像魁本

羣玉堂精刊

同竿堂

俠客傳第三集引

今茲夏月、本集亦脫稿、是日得拓本一張於滬華書賈群玉堂、閱、是楠廷尉正氏朝臣、所禱房山神宮尺書也、左方有歌、忠誠不朽、華跡如一日、其幽緘但有華押、不署宜

13
1245
11

職姓名即以丸山可澄氏華抑藪
比校已奚蹟無疑者也意楠廷尉
文武兼備而其諷詠太平記及吉
野拾遺所載各纔一章與今所見
共為三歌其它佳作猶有惜泯滅
不傳是書可謂嵐岑片玉矣本集

多言楠氏事因翻刻所得拓本以
剿人嘗卷四方君子尚鑒焉虛中
有實知非游戲則拙編亦增光
天保四年暑月之吉燒檀拂蟾題
于庭學燈下　蕙笠漁隱

董齋盛義書

畢俠客傳終

俠客傳第三畢卷一

開卷驚奇俠客傳第三集總目録

壹卷

第一回 姑摩姫苦學讀劍書
无上玄通化現仙觀

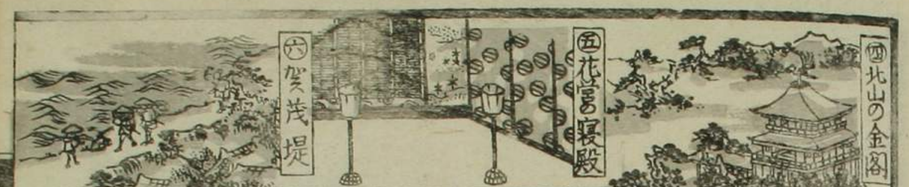
第二回 論順逆九六媛授復讐
踰香煙姑摩姫邁北山

第三回 金閣女俠殲讐
葛城僊孃畀警

貳卷

第四回 禱考墓楠女擊殘仇
結綦冦沙彌訟火祥

第五回 満家計遣羅轎
維盈囚免投石



參卷

第六回 正直受命送姑摩姫
彼岸二謬開八九莊

四卷

第七回 縫殿自燒飛樓
安次送死會生

第八回 山上千里鏡克闘莊院
佛前本命録初知病妹

五卷

第九回 隆光千速驅他賊
長總逆旅遭騙渴

第十回 疑似孽小夜二殞命
瘞金計木綿張越牢

總目録終 本集亦復起應永十一年秋八月盡十九年秋八月
其第二十一回已上總目録見第一集第二集首卷

木綿張荷二郎
楠式部少輔正直
像賛第四

忠義膽女中丈夫美而不艶
劍術豈麗仙娘妙扶野史心誅
奇才雖後祖德何孤勸懲啓懞
口碑罔朽補天以石鈌陷劍數
贊楠姑摩姫　玄同散仙
赤松五郎則助
楠姑摩姫
像賛第三

管領田山 満家
孤忠薄命雖志不伸
天賜有後摧櫃得珉
賛隅屋維盈
鶴齋野叟
隅屋小一郎 維盈
像賛第十五

むかしの人をまことふかいみふかきものもなきこそかちちろ義ふせよ 賛節婦縫殿 愚山人
節婦縫殿
九奴隷 彼岸
像賛第十六

品倉復市
安次

而是
皇朝沒羽
箭
良蝋
果得難環

御教書

紫野大德寺
沙弥宗純

賛安次
蓑笠漁隱

賛安仙九六媛

九年よあやつ
昔もみの〜ゆふ
ゆく〜〜をひやと
ハ年の山う濱
雷水光秀

葛城きくの
九六媛ひくろ

侠客傳第三集列傳追加姓名目録

将相 足利義満 足利義持 ○以下係子室町家臣 斯波義將 斯波義教 細川満元 畠山満家 楠正直 熊谷満實 宮満重 赤松則助 曽根山高春 遊佐就盛

武士 品倉復市安次 篠持媒鳥 橋高猟九郎有幸 塚見木兎六づろく

市人 澳津逆旅主人 数坂皺三

奴隷 彼岸二ど手作て

荘客 四老村長 八九四老三村荘客数名

婦人 水石の苦子 垣衣 鈍梅

浮屠 沙弥宗純 女僧智圓

小女仙 多豆づ知止湍

強人 五十槌電次隆光 五十槌雷九郎隆成 曽曽利鼠坊八

雲館奇峯五 白鮫振平 出水挺頭三 木綿張荷三郎

野狐紺二 小田貫無地内 這二名荷三郎侠家小賊也 本文不載名字因出于茲

通計三十八名 莊客名字侠者多有不數焉 與第一集第二集所録列傳七十二名共二百十名 追加姓名目録終

開巻驚奇侠客傳第三集巻之一

東都 曲亭主人編次

第二十回

姑摩姫苦学剣書を讀む
死上玄通仙觀を化現む

再説楠姑摩姫は仙書を九六媛に受けしゝ。密々に繙紐て熟讀ふ日を累ひつゝ。学の窓に螢雪の思ひを耽らしたりける。初の程は情として霧の籬に立つゝ。文字は讀とも理義解しかゝ。韭を隔て癬を掻く心地のみして甲斐なくも勉学びく怠ら玉。夜食を忘れ寝ふ思ひ間は。あゝ一巻ゝ鮮しゝ。ゝて隨ふ名香を焼て女仙に見参を。教を受んに面ぜと。学心を励して。研究ゝ知るよりも。伯母御前智正尼隅屋維盈の妻縫殿の病痾の所為歟と問慰めて。いかゝ何とゝ。ん面色の常ならで物思ひげなる女の夜とゝく日とゝく。ん物

学びかうち執事そのまゝ在まれば鬱癡ホトヽぎすめれ稚況程に春の草は向萌とるかひと
況天人一過ぎて倒に養生の與宜しかるべき徒遣羽子何まれ彼まれ庭へも折々出すべく
みづ〳〵頗ひのかゝとのいるく毎ホ疎き。あゝぞもがなと思へども十回一度はその意ホ儘し。
同庚なる小比丘尼と歌まよ縫殿さへうち聚合まそ春は裙野の草結び夏は菖蒲の
根合に長日を一ゝ。ろホもあゝ偽を人を慰る戯れるゞ〳〵都備。雛の遊びよ折添
ホ接を人でも偲ゞ吉野内裡の夢の跡覚て悔〳〵くるかあるホ新葉集の歌骨牌と
讀〳〵下に合る順逆の理はあり〳〵ゞ〳〵合ぬ恨は乱れ世況細小鶯最竹ゝち戰ゞその瞳昏ホ
るゝまでも。惜しもあゝ可惜日を空ホ消〳〵ゝ折々の童蒙遊戯は外視のゝ。姑麻る姫を志
和るゞ況はあゝ所れば〳〵ゝ仙書を黙讀〳〵て又月屬を歴る程ホ。ゝ〳〵ホその意を況く。
思ひ半ホ過る隨ホ發明あゝ條もあゝけゝ初鮮〳〵かゝろ〳〵折ゞホも。倦まゞ学びとるるホ。
既ホ佳境ホ入〳〵まくゝろる。狭〳〵まを就てゝ。ゝろゝる〳〵況條々の。那這とあくヨまれば今ゝ

況と思ひて。心祈ゝまると七日許。一夕悄々地を起出て三裏を九六媛の授ける。香を焼況詠ホ
儘して煙を跟ゝ〳〵ゝ程を憶ゞホ外を出て。葛城山やあゝんぞゝん嵯峨我る高峰を来
たりけり。折ゝ月の明ゝるけゝホ但見れば一座の樓閣あり。茂林の間ゝゝ顯れる。畫る雲る聳
えゝる。姑麻を姫迫を瞻仰く。且訝り且歎ぶこれゝるゞ〳〵と思ふゞゞ。ゝゞ況走り近着てゝれば門
扇ハ鎖〳〵たり。叩せんもさゝゞゞゝ。ゝゞ況那這とゝるホ視熟ゝ草木ヨくあり樹毎の咲添
花の香ハ馥郁とて三年常るゝ〳〵況三千年を熟る桃やあゝん月光ホ啼ハ慈悲心鳥
狄清亮とてその聲秒ホ浮世の外の調ホ似ゝり。砌ホ匍匐ホ純白の鹿ハ人とんて駭り
ぎ遠く者羽搏く丹頂の鶴ハ客あり〳〵も報るゝ。耳を聆目ホ看るゝの愛〳〵ゝ〳〵ゝ
いとゝゝく那桃源を帰路を辿れ龍宮を花を思ひ浦嶋の子も武陵の民も恁ありけんと
況ども。況ゝ難ゝ鵠立む程ホ忽地裏面ホ登然と人の出来る歩响して。やゝゝ門扇を推
開く。ゝゝ況れば是別人るゝぞ。鄭を九六媛を俱して来る。両個の仙童女ゝぞありけホ登

時件の仙女童们ハ。姑麻姫にうち對ひて。ある姫上來ませし。今甲夜よりして仙孃の等
寂ていまさん。卒這方へとひきつけて。一個ハ走りて奥に赴き。一個ハ姑麻姫の先に立て。軈て
案内をまうけの。さるほどに姑麻姫ハ。些も怯る氣色なく。仙女童们に從ひて徐く欽びを
舒揖譲して。擁れて内に入りつゝ見るに。玉樹瑤草の種々なる。黄金成る石ハ踏渡ん
とひかりて頭映く。伽羅もて造りし歩廊ハ。蕙茝蘭の室に入る後よ見ゆ。瑪瑙の柱瑠璃の床
皆人間の東西ならぬ。奇麗壯觀亞る如く。目覚しかるぞとゝ想ふとき。憑る高峯にあり
とも思ひかけるぬ樓閣の美を盡したる光景ハ。夢歟現歟。然るにてもある仙孃の神
術もて奴家に信を増させんとて。あの樓閣を幻になせしものならん。然らばハ這頭に
有るぬ大廈高樓へけりと思ひて。奥に入る程に。既に幾间歟うち過ぎる。南面に扁額
あり。心をもなく瞻仰れバ。无上玄通仙觀と。六金字を題したる。前面遥に高座の正面に祠を
累布なく。九六媛ハ其首に處り。錦綉の色々なる衿襲の衣白やかなく。緑髪兵肩

より背に垂たる。その黒髪の衣ハ繍りて。神欲人歟と怪まる。高く捲せし珠簾を焼占
たる香爐峯の雪に旭の照添ふに似たり。懸旦したる綾帳ハ風に靡く五彩雲の繊に
花を降るが如し。既にして九六媛ハ姑麻姫が仙童女に案内せられ來ぬるをみて
後方に侍る又那一個の仙女童にさゝやきつ。立迎して招き寄せ。祠を分ちて傍に坐
らし。仙女の小やかなる背を撫拊て。善哉稀世の神童女謚しようにも差にて。仙書を覗ひ
研究して。なんや一稔に及びたる苦学嘗るふあるの最も愛でたし。とのたまへバ姑
麻姫ハ遽しく祠を擁遣り席を避て。それらぬひけもなく褒られまつるハ倒に心裡恥しくはべ
るなれ。那書を受まつりしより。密々に学びども。なほ解しかたきのみ多かりし。されバ時
いろふして胸の挾霧の霽るゝ時もやと逆學びつゝ。今宵悄々地に焼試る香の烟に
從ひて來るとも知ず。這仙觀にまゐりつゝ。あに目に撒りぬる歟し。この才淺き詞に盡し易から
お教させたまへかし。と異ひつゝ。三号の仙書を合せバ。九六媛ハそを受合りてうちも

開き書案に並借て微笑て。そもそもの該れる歟。疑ざれば学術進まず疑ふ故に邪路に入る。什麼疑ふと可とせず。疑ざるを可とせず。心を問つゞ分明ならん。壁間の我這仙観の深山に似たる荘観なるを。和女郎は這さえ疑ふ知ざる大厦高楼も又紫門も白屋も只住む人の心にあり。然れば富貴を羨まず足るを知り分を守れば宮殿も高茅屋も異なる事なし。又足ることを知ざれば千席の室に坐れども。なほ萬席を羨む。此是悟りの入る。凡夫の迷ひを醒さべき捷径にあらずや。神社仏閣華美を盡して。凡夫の信を増す欲を我這仙観楼閣も壁間の辰巳氣海市の如し。実にあるにあらず。あるとゝへば則有り。ないとゝへば則無し。これを命けて幻境とゝ。又只這山のみならず浮世は総て幻境なり。悟らぬ故に夢の中に遊びて迷ひ。五十年夢なりと誰か知るべき。上古は俗質朴にして民ま

ち〻貴人も茅茨不剪采椽不斲宮室を卑うして。力を溝洫に盡す。那唐山聖とゝいふ。世禹の質素を倣ふ。我神風の伊勢山田なる天照皇大神の

大宮所を拝まずして華美を好む。外物を飾り驕れる故に長久なる子孫廢絶致さを暁らん。抑亦悲しかるべき。富貴四海を有ちぬ天皇も禍を免れ。御祖の神の神慮に差て驕奢の為に民を苦ら宮殿に美を盡して留害運を旋さるを快る。建武の壊乱即是なり。況世を辞跡を埋め神仙と成り。仏菩薩と稱へられ久方の乾坤と倶に長久なるものは是泰河房の餘材を討め。身を九層の樓臺に挙て樂しとゝいふ。何をか。凡夫に異なるものとせん。然るに仙家は草庵の柴微宮殿に居まく欲ず又成仏を願ふものは天堂の快樂を欲ず。その惑に甚し。知ざる濁世を厭ふ。流に歌ひ石を枕に。身を雲水に儘まるのみ。絶て求る所なれば東西とて足らぬ事なし。世に知らるゝ事なければ人に求めらるゝ事もあらじ。されば心高けれども危からず。身は低けれども跌らず。天地と倶に升降を。これを名つけて山中の宰相とゝいふ。和女郎はこの義を諭さんとて。茲に仙観を化現せり。先よくこれを見よかしとゝいふて。姑射姫然る頭を抬げうち拝して有がたきまで感金言

玉音面前に听くところざせば疑ひの霧雲霧かくらん旨取可憐るべん論を稱蒙の惑ひ釋るべし。爲学ぶ目の淺くして修行足らねば今速に彷徨たかるべ。就て又問まらん。約そ学問の要領は發明をして專務とも經書の種々形る。信して後に疑ふとあり。疑ぎまざ学術の進とかてと雪解るふそと疑ひまの何をも發明まるよう仏くんやまの義を教のへ。と いへば九六媛點頭てそい勿論のるか。悟りのその師の教を待ぎ感して聽て悟るとあり。那学問のその身に益あり。益して後に損ずと名づけて悟道とのふけり。然ば世の與人の與に教訓の書と著まめもその身聖人をられば瑕疵ある故に学ぶめ稍疑ふく その非と知る。孔子の送書老佛の經典も皆聖人の教誨也。瑕疵ある故に人疑ひ倘聖人を疑ひ必邪路に入んのと和女郎まの義を忘るとあり。我書を讀むに至誠とのそ。絶く疑ふとるい今面前に指示まとも終に劍術を学ぶて進退隨意るくんのと然るとい香を焼て烟と御導すに倣ふ及ばず人を知られ他這仙家に往還自由とるざるんの穆ふや

勉めるべしと。うーまもなく失ひ易ふいべしるの是まを復に會の快さとい。そぐ喜く働る。仙書三号と合る抗て卒とそ尽返ふで姑麻姫これを受收めて欲ひと演別を告身を起きんとせ程に仙童女們ふるて香爐と合て恭く女仙の身遺に差寄れば九六媛へ香盒る香一撮ふ出て徐に熏ら濃煙の忽地に雲と做るそ。姑麻姫とち無せ窓ふる出て西く秋と点へ奇る哉姑麻姫の瞬息間に如意宝珠院に身臥房に還ふ。知るの絶て ふるけ是ふ。て姑麻姫仙書を讀むに初に似た傍に人のるき折々に香を焼て身を浄め元上玄通神仙嬢の名歸と念ずに百遍許徒而徐に繙て文義と討ひ奥秘を探ふ智と祛て疑ふとるく只深信を宗として学ぶと又二稔かり。初学の年と加れば茲に三稔に及び学術進と自得して至ぶ所ふ。年歳に十歳に乳臭抜れる童女れども。その賢才の老着る和漢の国秀淑女にも儔ヨヌるべくもあるべ況仙術とるて身の輕とも毛の如く奔走升降意の隨に。食ずれども饑を

おぼえず睡ちぎれども労とも知らぬその奇その妙意表に出て我を怪む可きれども光と包む智を秘して色にも見せざりければ伯母の尼御前隅屋夫婦い徒あるべと知らねども姑摩姫の性大人備て容止漸々に美麗を月に擬へ花に比へ徒る妙と情に祝髪黒衣の優婆塞婆に倣て浮世の花を散さんや三年歴さんに佳壻君を討索めて絶る楠氏を興さんぞと維盈縫殿に問ける間話休煩に程よ姑摩姫い学術既に奥義を極め一技に通べるもわ〜ぶれい師の仙嬢に報ての歓びと喜さるとも此けれいその夜艾悄々地に臥房を起出て口に咒文を唱れい戸節の穴敷より忽然と去る外面に出けり徒ての進退やすかりけりと思ひ又唱る咒文と倶に身い只い飛鳥のごく突然く房足い地を踏まぬ瞬息間に葛城山に仙観に来ければ九六媛とれを召近着て其の術を賞め側に坐らして別後の安否を問ふに登時両個の仙童女い姑摩姫に茶を看め浮世の事と問慰めて管待初に弥倍に少選して姑摩姫い師の女仙に向て対

ひて皇襲に論さるるに口訣に遵ひまつり智を祛けて疑ぶ既に学ぶと稍年来に隨に学術成就の時至りけ心神毎に清朗に身の軽きこと毛の如く走ること飛鳥に捷れりその秘訣を稟さんとて初て術を試に果を奔走神速に地を蹈ぐて成熟あれい復雙言の美い心安りるれども時まぐ年ねい今より幾等と三稔に須て宿望を遂さ女仙術の剣侠い御高に恥さく示せ如く已に沒ざる所多に毎に施さのごとくぶの術成就ともに文武の道に疎くもあらぬ所の今より夜々這里に来て文武を学び武を講ずべ後に用ることあらん亦這義を懈りそと仰れて姑摩姫怡悦に勝に即便這夜を初とて夜毎々々に来り儒書い十三経を上日とあく史傳に渉り墨子を学び老荘関尹諸子百家の書兵法の七書武備志の類皆悉講を聴て儒学も既に疎るぶ武芸熟い唐山の十八般本邦の鞍馬八流習ぶとの所に

そが撃剣の敵なき両個の仙童女と生されたり。原這両個の仙童女は豆と喚れ知止濡
と呼れて年十二に至れども倶に九六媛に仕ること幾百年になるやらん。よく仙術を傳受して。
鍾離權が青龍の剣法までもならひしかば初は姑摩姫他們に及ばず学ぶこと稍久しう
して他們は及ばずなりけり。登時九六媛教て云う撃剣は是士卒の技大将は弓馬を
能して陣法を宗とすべし。遮莫這撃剣はただ是士卒の技とて大将たるもの学ばずは近
く敵を拂ふことかなはず。今の世も只大刀をもて人を斫んと欲すれば人も亦大刀をもて我を斫ん
と欲す。這時勝負不定、何をもてか敵に勝ん。勝こと必枝ならず一心をもて仇を防ぎ一心をもて
敵を征すれば必勝ずといふことなし。然ば仙家に青龍剣の真法あり。又禅家にも活人殺人の
剣法あり。仙佛その方異なれども、敵にあふて死を忘れ、一心逆決定して自若としてこれに當
らば柔よく剛を征すべき。その理は即一致、這義をよく胸に藏めて機に臨みて乱れずは撃を
うつすべは既に足れり。なほ又弓馬を学ぶべしといひて躬て一枚の紙を折り馬に造りて口に呪文を

唱れば忽地一箇の白馬に做りて鞍も鐙も具足しつ。主客も庭に立てけり。登時又九六
媛は姑摩姫に教るやう馬の進退は手綱にあり。敵にも手綱を砍らるると見れば瞽者の杖に
離るるに異ならず。是故にその手綱には細鐵鏁を縫藏よと義貞記に識されたり。大将の用
心は只這一條のみならず千軍萬馬の中といふとも大将騎馬に修煉して乗走
旋風の如く些も礙滞あることなければ敵はこれを轂すまくするに馬の脚を斫ること克ねば箭を
射出しても中らぬものぞ。されども又新田贈中納言の軍記に識著られたり。然れば騎馬も軍
旅の緊要なれども其はとまれかくまれ。必よく善学ぶべしと諭して是夜は馬術を教え又次の夜は
的を掛て射法を教らる程に、しかれば姑摩姫は丹甲夜々に宿所を出て獨仙家に赴け
ども竊に分身の法を設て臥房に熟睡せしめて形貌を遺したりければ母に側に添臥せ
し乳母の縫殿も夢にだも然ることありとは知らざりけり。然而光陰荏苒として又二三年を
歴にければ姑摩姫は仙書を讀てより久しくぞ成ぬ。茲に五稔その身の年も這春は十二歳にぞ

ゑふけ。時に応永十五歴。這年の春京師へ入道相國源義満公主上（後小松天皇）を北山の山荘へ行幸成し奉らんとて。正月の時候より這沙汰あり。現足利家の世盛り哉。嘸ど靡く青人草の夫役に参るもヨワりければ。姑摩姫に這風聞を告ぐ。窃に早裏に我初て神仙嬢に値遇せし折剣術の書を授けおいて今ようして浮子ぶと五稔に巷に仙術成就。六稔にして復雠言の志願を遂んと宣ひ又只剣術のみなりまを御庶ふよりて文学武芸も大ぶ学び終るに非除一稔なりとも。あれようとのそ願ひ禀して本意を遂んと只管に勇む心のいそがれよの夜仙家に赴き。ヨヌ豆と知止流が遽く出迎へて報ずるに。我仙嬢に今朝未明に日の神より年の首に寿詞を奏しまつらんとて。衣裳を更め雲に駕して天宮に赴きぬ。その折咱们に仰るやう。我に久しく天上に姮娥列宿に見参せざ這它外國なる西王母太上老君名山の諸仙をも訪ずと思ふ。任れがかつ変数なる日に春の季より夏の季に渡然ぎに五六月の時候に及ん姑摩姫が又来ぶ。あれらに一を報知し。我かつ来る日まで這里に往返せんに要ふ。宿所に在るに七よりあれと報て禁めおと宣ひ。といふを姑摩姫ちゆて忽地望を失へども却あるべよあらぬれば告別して宿所に還りて更に又ぶ。我師に飛行自在ぞ。萬里の路もその旦中に往も還るもあらんよ正月より来ぞ。四五月までの遊歴いろいろなるに。我復雠言を豫より下めに年に近つけども。足利の武威直盛なれば仙術至妙の剣術にも尚敵ふかりしあるを今さら如右いろいろに遊歴しとの誘へ。対面を許しぬ。ぬ倘ちらんぬ熟の年。熟の時に宿意を遂ん悲しきといへども。彼苦しき胸の火を鎮めく再ぬふやう。噫我ぶ愚痴なりき。得かぶ支も誠を盡しく。疑ひまぶ就きと豫られ去ようにあるに漫ふ性起く恩高き師を疑ひしを罪深か。允さぞぬと合掌黙禱懺悔ふ胸いとけくもまぶ明ぬ天ふ思寐の枕を摧く烈女の才幹思慮匹あるにあらず孫ども仇をにくまり。師の女仙ふも今あるにまるけり。

九六媛
ちとせ

たづ
たまひめ
有像第九九
ことわざは深山おけを紫栗の
讀盡仙書奇女
又学文武
あそんぐらうきあきらん

第二十二回　順逆を論ぜて九六媛返矢を授く　香煙を踏く姑摩姫北山に適く

待べ一日も十秋に似る。姑摩姫は復雖言の大望頻りに急がれて心窃に焦燥ど。を二月の季秋四五月ゐゝでゝ還りぬべゝと雪え一女仙を我日もあゝで又仙觀へ詣て問ゝ

さゝが中庭に含る花をゝても毎より遲く心地せ。梅い過ぐ桜い未一開べ散れ散ら

後び春も暮果ぬ長く日ゝゝ〻ゝ難て五十餘日を過ゝる。今いよゝ比ゐべ。と思へ。その

夜葛城山ゐる仙觀に赴くに師いまゝ。師いまゝ。ヨヌ豆と知止端と二名のをゝ。

是より後は日を隔て西くと屋ゐりけれども。那女仙はかゐ来ず。春過く夏も稍降を

ゆゝぐを雨煩く乾ゐぬ檐に菖蒲菖く。端午の節供ゐゐるまけゐ。姑摩姫は今宵又

師の仙觀に赴く。帰觀の有無を問ぐ。と思ふも似ず黄昏時候より尼公の方丈へ

招れゝ。法談を聴せる短夜ゐれが更闌て葛城山へ竟に泊ゐぬ。次の日は未牌時候

ゐ。又分身の法を設てその身の代を宿所に送り。時を移さず葛城ゐに仙觀に来ぬ

どゐ九六媛は曲录に肱を倚掛け紋紗團扇を顔に翳て。假寝ゝく死灰に似ゐ。姑摩

姫も這光景に折ゐ。と思ふのみ。呼覚さんいさをがゆゝ。ゐて約莫半晌あゐ。九

六媛ゐゐ。ゝく頭を擡げ。声朗に誦ゐを聴けば。

俠槩惟推古劍仙　忠魂雪恨只香煙　誰知勇士生奇女。

隻手能翻宿世冤　慷吟じゝ身を起せば。姑摩姫ゐゝく找向ゝ。仙嬢かへ

らせのい。狹量に示させのいゐ。復雖言の時を等ゝゐ。一日も千夜を歴る心地ゐゝ。

剛才五稔に成ゐ。早くとも請禀さんと思ゝかども正月ゐ。這仙觀に詣ぬ

後び春過ゝ夏も亦五月の天に成ゐ。今茲ゐ本意を遂ゝ。と問へば九六媛點

頭て然に初に六稔としハ天機を洩さぬ與にしく。その実ハ今茲にあり。されバとて
惴るべかるも稍復讎言の時ハ来ぬれど左も右も人力ゆへ輙易からぬ大敵なり。善
順逆の理を正し。邪罪を天に告て。今後子々を下さべし。ではとてハ。傍に措れし
白金の香爐に香を焼薫らして。貌を改め眼を閉て黙然たる事半晌許。稍含笑み
て解て〻よ。姑摩姫這方へ栽ね。御前に南北両朝の蝸角の戦ひ五十餘年。原是
宿因あることを知る。和女郎ハ具に知りたる歟と問へバ。姑摩姫膝を找めて。そハ仰でハ待
ますども。奴家ハそをしらぬで思ひ足らねバ縁故を考極め得らねども。そも尊氏と直義
们が悖逆奸詐の做を所世の人通て知らぬハあらじ。とふ子九六媛嗟嘆して。そハ勿論れ
ども。那内乱ゆへ起本あり。言長くとも听ねかし。昔年北條貞時が奸計にて。最も惶
き皇統を二流に做しまつり。天子の大威徳を分ちまゐらせんと謀てしより。大覚寺殿
と持明院殿と。御子孫各々迭代に皇位に即あへべしと奏し定めまゐらせしより。大覚

寺殿とまうしたるハ亀山天皇の御子孫。然バ亀山天皇脱屣の後ハ嵯峨なりける
大覚寺を仙居に做しぬひしかバ。是よりしてその皇統を大覚寺殿と稱まうしたり。又
持明院殿とまうしたるハ後深草天皇の皇統也。中古後堀川天皇の外祖なる藤原持
明院基家卿の宅をもて仙居に做しよひし。幾代の天皇這処を仙院に為しぬひ
しかバ。後深草天皇の皇統を持明院殿とまうしたれあれども。梅松論に據るときハ後
嵯峨天皇の御譲位の敕詔に。一の御子（当今に弟二子とて作るべし）久仁親王 後深草院是也。御即位あるべし。
脱屣の後ハ後白河法皇の御遺領なる長講堂領百八十箇所の荘園を御領
として御子孫永く御即位の望を止めらるべきものなり。却次々ハ後深草の御母弟恒
仁親王 亀山院是也。御即位ありて。御治世ハ後々まで御断絶あるべからず。仔細あるによりて
なりと定させたまひにけり。これにより亀山天皇の東宮後宇多院御即位ありし後々に
至りては那北條が拒まうしく。後宇多後深草両天皇の御子孫をかはるがはるに皇

位ゐ即まろーらべ。伏見（後深草帝第二の子）・後二條（後宇多帝第一の子）・花園（伏見帝第三の子）・後醍醐天皇（後宇多帝第二の子）ゐ至るせのゑまで。ヨヌくい御子ゐ皇位を。伝へのゑとろるべ。と。北條高時が計ひ禀しと。後伏見帝第二の御子皇仁親王（光嚴帝）を後醍醐（後醍醐帝）の方ざるゆそゑ。快當今と推退まろ。東宮ゐ立まるゆゑ。是故ゐ持明院殿（伏見後嵯峨の花園の三院）の方ざるゆ。後ゐ。東宮（光嚴院）の皇位ゐ即せのいんと欲りー。又大覚寺殿（後醍醐帝）の方ざるゆ。後嵯峨天皇の送詔のごと。只當今の御子孫の継體の君ゐ。北條を武家ゐ。の情逆世と思ひ。陪臣ゐーて皇位を自由ゐ致さとゑある。高時一家を誅戮まと先皇後鳥羽并ゐ泉下の御鬱憤と慰させのゑー。と思ぬのゑろーけ。是内乱の根本ゐ。亀山天皇ゐ程ゐ後醍醐天皇ゐ北條一家とうち滅ーと。公家一統の大御世ゐるさんぞのを。と思食ろ。御隠謀已とゑ。ゐく中納言資朝右少辨俊基們と。悄々地ゐ仰合さーと。東宮（光嚴）・新帝（後醍醐）のゑん方より。鎌倉へ告めしーゐ。東使猛可ゐ上洛ーと。帝を倉ちろ

らんと。故ゐ後醍醐天皇。笠着ゐ潛幸ちせーかど。終ゐ武家ゐ倉ゐ。隠岐の離宮ゐ遷されゑ。却高時が制度として。東宮（光嚴帝）位ゐ即られて。正慶と改元ゐ。是より江湖大く乱れく。北條高時そゐ一族まで。新田義貞ゐ誅滅され。両六波羅（仲時・時益）ゐ赤松圓心足利尊氏們ゐ為ゐ首と喪し。千剣破の城ゐ向ひる。十萬餘騎の東軍ゐ。皆正成ゐ剿滅せられ。天皇（後醍醐）船の上（伯耆）ゐ。より還幸あと。高時ゐ立まろせたる。光嚴帝を退ぞ。正慶の號を削られ。又元弘ゐかへーゆー。聖運茲ゐ揚焉貴ゐ賤ゐ。ゐべて。皆聖德を仰ぐゆのく。素懐を遂させゆーよる。帝ゐ。ぞろ儆らせゆーて。大内裏の造営ゐ。士民の恨ゐ。と。ゐ。ゐるゆ。ゐ。剿。ゐ。詔内奏ゐ。貞元制度のゑ。ヨヌくけれゐ。賞罰當らぞ。士庶相怨ゐて。ゐ。復建武の逆乱ゐ。ゐ。異朝唐のゑ宗ゐ。那身臨溜王ろー。時幸后の讓の乱と討美げ。父相王（睿宗）と。位ゐ即け。我ゐ。ゐ。禪と受て。治世四十餘年ゐ及べり。そゐ中ゐ開元の初ゐ。精を厲ー。政ゐ親を。國治ろ民

安くして中臣の君とおぼしめしに天宝の年に至りて安禄山の虚乱あり。是より唐祚衰へて太平の日い稀なり紀最も惶怠と云へり。初後醍醐天皇も徳を脩め政に親しき善萬民の心を治めぎ家條誅伐の叡慮と苦め。権威強盛なる北條高時入道をうち滅しぬるまでを盛徳の君なりしに還幸の後御ちろ驕りて中納言藤房の諫言を容れず賢士女言第一なる。高氏直義を愛めて功に過ぎる恩賞い虎に翼を添るに似る後患ひを思召れず。相模二郎時行を追討の折請に儘して征夷将軍に任ぜられしに初叡慮に翻齬なり。約束あれらのあん愆い那唐の玄宗に似たるのみ所も最惜しけるなるべし。倩当時の軍功を案ずるに初楠正成が絶なりける隊兵をもて千剣破赤阪の城に籠りしより東軍凡八十萬囲ぐれを攻れども捷ぎなく忠義の毎に官軍に眼を屬く。その機を待の勘なるべし。亦程よ義貞圓心東西に義旗を揚て勤王の功虚しかるべき。これに由て論ずれば。その功正成を第一とぞ。次に新田義貞を鎌倉に討亡げて。その巣穴を拂ひ。かたりて第二の功とぞ。又その次に圓心高氏六波羅を攻滅し。名和長年い船の上山に佐々木清高を討走らして皇居を守護せ。舊都に還幸なしまゐらせる。その功這那甲乙なし。第三番と做ぞ。その子に足利高氏い世々北條と通家なり。官職あり。所領もヨヌクなりとて世の人い尊敬大かたなりければ帝も憑しく思食さる。高氏悄々地に准后の母后新待賢門院是の媚なり。屏風内奏を経なりしに。その功に大く過ぎる三位に叙し。治部卿に補せ。剃ん諱の一字を賜りて尊氏と召れ。朝恩允洪大なりしに中に赤松圓心の軍功あれども賞と沐ぎ。その子律師則祐ぞ。大塔宮に仕へと。准后の忌せぬふりなり。佐用の荘の賜りて播磨の守護を召放され。圓心い這恨をく執成しぬ。初尊氏ら反逆の折ぞ。賊首に隨従ぞ。那悪と次貫けしぬ。官軍他に熟所を

捕られて戦ひ難義に及び給へ。これを見よ圓心が初六波羅を攻め落しぬ。その身の栄利に倣せ給へ。朝廷のあん與に逆らはせ給ふ。孟子の教へ君の臣を見つること草芥のごとくなれば臣も亦君を仇と見る。讎敵の如くなれば素是故あるなり。君たる人を敬るのみ臣たるものに非ずあらざるべし。その故に孔安國が孝經の序に君が君たらざるとも臣いかで臣たらざるべきといへるにあらず。圓心忠義の心あるべし。恩賞に功に當らざるも時の不祥と思ひ做して臣たる道を盡すべし。利の與に朝廷を恨みて虎狼野心の本性と見し陸地反逆に荷擔して尊氏が股肱と做りたる。行狀凡彈を做すに堪たり。然れば宋の儒者朱熹の言に人は只曹操が漢賊たるを知れるのみ孫權も亦漢賊たるを知らざりしと。我恐らく後々までも南帝御子孫の與に害を做すべし。必赤松が當黨も且我逆のあん圓心もかくの如し。又尊氏の奸詐を以て初高時の催促に從ひて名護屋高家と共侶に伯耆を投て出陣の折高時に疑まれて拵書を呈す。その子を質に出す。却て六波羅に到りても東西の勝負を揺りそ軍馬を篠村に駐めて動かず。高家陣殺あつと少て猛可に官軍に從ひまゐらせて赤松圓心千種忠顯卿と共侶に六波羅を攻破りて第一の功を以て小後鎌倉に在りて謀反の折義貞節度使を奉りて追討の通途官軍屢利あると少て尊氏慌て頭髮を剪て建長寺に入り内心真実逆罪を怕れ給ひ然しも朝恩淺からざりしに叛逆まゐらせ給ふ。世の人に笑はるる奸計に世の人に笑はるる。奸計に出でさるを小後京中に軍敗れて筑紫を投て走り折闘戦を君と君とのあ爭に逆みさんとて。後伏見院御在世の日に綸旨院宣を禀け賜り新院光嚴上皇も亦共侶に尊氏に一味まゐらせ給ふ。尊氏遂に光嚴帝のあん弟光明帝を推立て御位に即まつり奉る。延元の號を用ひ給ふ。尊氏の奸計なり。光嚴帝は高時が立まゐらせ奉る君なれば尊氏重祚を禀け給へ。萬乘の御位に即まゐらせ給へ。その弟光明帝（後伏見第四子）を御位に即まゐらせ給へ。

廢立の功をもて已が隨意せんとす。その故に後醍醐天皇、叡山に行幸し、舊都に幽され、竟に吉野に皇居をトして南北朝と分れぬ。然りけれども尊氏、北朝のために與に忠義を盡さんとせず。皇統に左袒せず、這風雲の會に乘じて、只我家と奥さんと逆徒倆しかれば南朝後村上天皇の正平六年冬十月尊氏直義不和に乘じ、北京を勢ありければ、姑且危窮を避んが為尊氏義詮父子詭りて南朝へ降參せり。折南朝の君臣もその機を猜して勅免あり、北朝の劍璽を南朝へ渡し、まゐらせて北主崇光帝を退け、太上皇のそる踵をまゐらせらる。その次の年正平七年春二月、官軍の大將楠正儀北畠顯能千種顯經仁桂河より攻入り、折足利義詮敗走す。みの、濃州へ逃る。折持明院の三院を情なくも棄措て御安危を天のあらぬ。その故に光嚴光明崇光の三院い南朝に奪れぬ。加名生の別宮に幽せ奉る。仍後尊氏義詮仁詮說く。崇光院のみ母弟後光嚴院をあるべし。

御位に即まゐらせけり。これに由て親るとも尊氏義詮に做て所北朝に忠あるも、あるまじ只國賊といわれぬ與に立まゐらせ、君なれば君臣の名をあらざる萬機の政事に毫だるも御あるに儘せぬ。是より王室卑うして、風俗陵夷に及ぶ。歎くべきあるべし。在昔保元の内亂い新院崇德太上皇と後白河天皇と皇統爭ひに支起り、君に弟兄臣も弟兄、父子兄弟為義義朝鎌倉磨ぎ釗を削り、三綱乱れ、國治らず。亦復平治の逆亂あり、平清盛武功ありて、獨兵權を執り、推て天子の外戚に做陟て、殘忍悖逆せざるなく、官家いあれども无が如し。是時に當て、源頼朝義旗を伊豆に配所に揚げ、平家を西海に討滅し、凱歌を京師に奏せ、後白河法皇叡感あり、摠追捕使を授られ、是より武家い敏に昌して威を八荒に輝し、朝家をして益衰へ、武断に憑らざるとなし。頼朝の兒子們亡びて、北條義時陪臣として國

命を執りて四方を威伏し義久の乱起るに及びて後鳥羽上皇門順徳の三皇を孤嶋に遷し奉りて暴威を子孫に伝へ給へども後伏見院の御時に亀山法皇御隠謀あり那北條を滅して義久の御送恨を雪めまゐらせんと思食けるに浅原八郎為頼父子が内裡に走り入りて自殺せしかば御隠謀の事世に洩え表に當今伏見院に北條貞時が厚く覚待なりしかば後嵯峨天皇の御送詔に遵ひ奉りて推て皇位に即けまゐらせを徳とせんと鎌倉へ報ぜしかば中の院亀山新院後宇多院を六波羅へ遷し奉るべしと勾えしを亀山法皇駭ぬ給ひて一切知召さるべきを折言の如消息さへ貞時に賜りければ支の忽劇に静りぬ給へる又御四世を歴て後醍醐天皇御即位の初より内裏に高時を誅戮して後鳥羽亀山両皇の御送恨を雪めまゐらせんとて年来御隠謀頻りなるに東宮光厳帝に北條高時が相謀て立まゐらせを徳とせんと鎌倉へ告させまゐ高時竟に滅

びて又尊氏に御心を寄ぬ給て後醍醐帝に苟且なる御父子の義あるに我思召れぬ是より朝廷南北に立分れて天に両大陽あるに似たり那北條が悖逆の罪義時に三皇を孤島に遷し奉りまゐらせられぬ直義が残忍なる大塔宮護良親王一の宮尊良親王を始まり南朝の皇子皇孫他門が與に幾位欲に命を喪ひ給ひしその事軍記に載るも漏るもあるべし又は南朝竹園の金枝玉葉の輩まゐらせ北朝の君も亦闘戦難儀に及ぶ毎に尊氏義詮門に棄られて或は敵の虜となり或は近江の山里に伶仃ひ萬機の政事を夢にも知召さるもまゐらせ南朝に威勢武家に及ばせ給ども政は朝廷に生るに劣りぬ初より保元の乱原を思召て後嵯峨帝の送詔に縁て大覚寺殿持明院殿御執着の御私欲なく高時誅滅の時に當りて御合體なはさに非除尊氏猛威を振て四海を呑んと欲するとも其憑る所なくして竟に自

滅ふ至るべし。此ハ是持明院殿のゑん行心とまうすものゝ又後醍醐天皇の御失策もヨリ
るゝ初北條高時を滅さんと思召せし比一日御隱謀の趣をのゝ中原章房ふ仰合
さるゝことありけるふ那章房ハ儒学の達人忠信正首なりけれ共その身ハ
悄々地ふ諫なりしを他ゞ口より洩のゆせんとゝ闇數るゑ數るゝゆへけり夫天道ハ善ふ
福して淫ふ禍をその臣若罪あるゝ法度を明ふして誅ゆべきふ章房素より罪
あるゝ只ハ忠信の心のみ諫稟せしゝ影護しとゝ。竊ふ數るゝゆゑ絶て至尊ハ乾
所ふ行ふあるゝ小後笠着の戰ハ破れて六波羅ハ幽れゆひし折快々立種の神器ハ
持明院殿へ渡しまゐらせ御讓位あるべしと謙稟せしゝ云云とゝ哭て出しゝ太平
記ふ載られどこの折那賀物神器遣措なりるべし。小後又尊氏ふ賜されゝ叡山より還幸ハ折叡
慮ゆ似ハ幽閉られて尊氏ゞ需を拒むふ由るゝ。豫造置たる立種の神器の贋
物を持明院殿へ渡しゆけり。蓋立種の神器ハ御祖神の御送宝ゝ外邦ふ比

類あるとゝ。然ハ天日嗣知召ゝ継體の君授受まりゝ皇位ゝ萬歳萬ゞ歳ふ
傳さるゝハ。至神至秘の宝ゝ一時の權謀なれどゝその贋物ゝ造出して逆徒ゝ
給ひゆひふけれゞ尊氏も亦私ゝ国位の君ゝ造立して那紫の朱ゝ奪ふ南北沖縄の
禍ゝ致しなりて。ふ這君後醍醐ハ外剛ゝ内柔ゝ初御隱謀の綜の趣錄倉
崎ゝ折御告文ゝ賜して神ゝ拠言て高時ゝ怒ゝ寛ゆゆひしハ那正応ふ亀山帝ハ御先蹤
ありとふとも。天子のゝきるゝなるふあるゝ然ハ孔子のハゝく古の愚ハ直ゝ今ハ愚ハ詐
る、亡天ハ如ハ詐れゞ人これを笑ふ。そゝ天子ふして俳ゆゝ民ゝ為ゝ従ハ徳る
故ふ孔子のハゝく晉の文公ハ譎て正しゝ齊の桓公ハ正しゝて譎らゝ那桓文ハ五霸ハ
隨一善諸侯ゝ會盟して周室ゝ尊びゝるゝ。その功有一ふ似られども葵丘踐土の二會ふ
于てその甲乙ゝ論せらるゝ。詐るゝのハ正しゝ。その身正しゝなりけれゞ今せられども行はるゝ。その身
正しゝかゝれゞ今ゝとハゝども従ハゝと。亦是孔子ハ教えゝ這君件のゑん僻ゝ文の初ゝて

ヨヌ為りければ一旦素懐を遂ぐるとも始めて終なく幾程もなく世に又乱れて旧都へ還幸なる支成らざ剰ヨヌく皇子達に賊徒の與ふ喪れるが情ら挾霧と做りて吉野の宮ふ隠れぬ孫帝後鳥山の義満ふ誓て御誓約の亜餅ふ為りて御祖神の嫌せぬ。

後醍醐帝のあん詐欺の応報なるを皐何せん最痛ましたるなるとのふ姑摩姫歎息の涙を需要時推禁めて然ちで具ふ知りかたるー治乱の顛末宏論麁生譚なのうへや結ぶべ死那御告文のあいも当日相模入道が斎藤太郎左衛門利行ふ讀せて聴けるふ叡心不偽處任天照鑑見と遊されける條を讀る折ふ利行猛ふ眦血垂ければ讀果ぜて退出せその日より喉下ふ悪瘡出て苦痛ふ堪ぜ病悩七日ふて死ぬと太平記はえ伝り皇威然ちでふ怕ぶるるの後笠置落ふ含れるふもあるまじく又尊氏直義ら叛ぜるーいふぞやと問へば九六媛微笑てその那事と記せーめ皇威を神ふせるく欲りて如右文を飾

アて常楽記と検ぜるふ那斎藤利行ふ正中二年五月七日死去とあり又高時ふ御告文を賜りーふ正中元年のとぞかー。任れふ御告文のあるとの太平記ふ尊氏の與ふせーー文勘死ぬ記せーめ誤ふ知るべー。但ふのあるとの太平記ふ尊氏の與ふせーー文勘らぞ。就中保暦間記梅松論ふ記せーめ足利氏ふ佞媚て順逆の理ふ違ふ言かー。現成敗ふ惑ふ人心盡く書と信ぜ。書ふ不如と孟軻のいふ宜ふあるぞ伝るるとふ姑摩姫感歎ふて。それを疑ひ解ぜるふ又後醍醐天皇ふ外剛ふ内柔ふて宜ふせーふ甚るる故ぞと再問へば然ばとよ那君英武ふすーはせども智慧ふ缺るふ所ありぞとよるも思ふぞ。当時朝廷の御微力ふ。一天四海ふ猛威を振ふー。高時を誅せんと思食立ーふ。畢竟患苦を凌せ。御本意を遂ぐ中主のふくぞふあるぞ。是英武心術の廣大なるふよりてぞ。されども時と勢を知召れば昔の如く公家一統ふ大御世ふ做さんとて士庶の歎ぜを入れずぞ。ぞく大内裡を造営せられ文武両道ふ公卿を

もそ。学らせのしゝ。頼朝以来華族〳〵。肩を尖ら〳〵。肘を張る。武士いれずるゑ如く。京家は奴婢を使ふ如く。太平の世を喜びも乱を樂むの弊。尊氏反逆の旗を建てゝ。栄利を求ふ武弁の毎水の低きに就くごとく。咸尊氏に従ひて朝家を物れ屑ともせざ。恐れ尊氏が武畧を長て連帥の徳あるゆゑ〳〵只是時と人の和を得たるゆゑにて利運を乗じ。その時の大志あるの那義時が輩を一呼せば世界武士。悉皆左袒せん。這勢こと思召れ。南朝の後々も軍旅の事に最疎る。仁柔の宮達を征夷将軍に做ゝ。せ且文弱る公卿生上達部を新田楠に対立ゝ。そを大将とされ。かゝ北畠父子弟兄と護良親王を除ては是ぞ。ゆゑ〳〵要緊の折柄狼狽ゝ。足縁黄ゝ。古の諸司百官。文官武弁の差別る。事ある折その器を擇て征伐を任ゝ。と今も古轍を踏ゝ。時と勢を知召れ。船を刻て剣を求る。ゆゑ惑とのいふべくのみ。又那護良親王の唐の太宗に亜流ゝ。元弘の武功大〳〵。件の親王を東宮に立まゝ。正成を七大将軍に召れ。義貞を副将軍に。俱に尊氏を討。官軍の軍威必振ふ。乱を撥る大功〳〵。讒言を信容て。護良親王を罪ゝ。剰直義に預け。鎌倉へ下ゝ。仇を借ゝ。酷〳〵。紀の衍心〳〵。這君大智ゝ。ゆゑ紛べ。叡慮の不足ゝ。又建武二年秋七月相模二郎時行が蜂起ゝ。大軍を率て鎌倉を攻入ゝ。折帝後醍醐・駐ゝ。法ゝ。尊氏を討の大将に。則他に所の関八州の管領と征夷大将軍たゝ。さへ立地に勅許ゝ。御後悔ゝ。又元元年冬十月比叡坂本の戦難義の折帝いる氏に賜ゝ。新田以下の忠義の武臣の苦戦を忘れ。ゝ。忽地逆臣と和睦ゝ。京師へ還事はせ〳〵。約束ゝ。の御失策の時の不祥ゝ。胆落て慌ゝ。外に〳〵。帝も性外に剛くゝ。はせども内に柔ゝ。理に違ふ。是のみ〳〵。後村上後亀

山のあん時に至りて兄に背き足利直義父に悖り足利直冬主に叛き細川清氏桃井直常山名氏清大内義弘赤松則祐に至るまで右の降参を勅免あり。大将に做へり大なる御失策誰かその非を知るべき天忠孝の國家の起本賞罰治乱の係る所忽諸にすべからず。不孝の子不忠の臣は法曹借るべき匹夫も容れず。御方に参ずる憑しとそ。当時の詮議既に識と後世に貽すべし沼れ高祖の利を忘れて侯景を信用せる徒に似て歎くに堪ず然るに那黨に不孝不忠の癖あれば叨に南朝の白眼を借りて野心を遂ぐ欲せり所以に雲妻時の脚帯よ去るべき或は戦ひ一時に敗れて屍を敵の馬蹄に懸られ然らざれば忽地叛逆の皇居に對して箭を發つ他門の虚実を知られに損あり得ざるを兒南朝の聖運の長久ぶりしかれらに由れり又按ずるに南朝後村上天皇の正平の年號は唐山梁武蕭正德の偽年號と相同し梁書五十六・侯景傳を検せるに徳に曰十一月景蕭

正德と立て帝とす。偽位に儀賢堂に即あむ年を改て正平とす。初童謡に正平元と言あり故に號を立てとれに応ぜとあり。徳れば正平の年號は先蹤是不祥と當時の儒臣とれを知らざるや。穿鑿疎忽是非に及ばざる幸ひにして二十四年に久あらに至りしかども南山に世を不樂て竟に崩御ゆるる前兆茲に彰然たり。約束されられ論辯南帝御二世に及ばざるべし。然べとて只君の非を算立て説短説長は忠臣義士の素よりせざる所へ君は君たるべとも臣は臣たる道を盡て君に諫めるべとらざる事を謀るは人智にあり事を做さは人力にあり。あられども成るとあり成ざるとあり成と不成は天命へ善悪応報あるに似たり。天定て人に勝つ果せるる尊氏は芽ふ癰瘡出来て五十四歳を鬼籍に入りぬ。神箭に射られと世の人通て知らざるのを又直義は鴆死せられ義詮并に基氏も歳を享ること長くを義詮は三十八歳その弟鎌倉の基氏は二十八歳を身故りたり子孫はよく盛るれども素積悪は家

俠客傳第三輯卷一
青年十二娘
劍俠希天朝
九六媛
りとせ
有像第三

俠客傳第三輯卷一
あさひめ
たり
共八
○三輯五堂印行

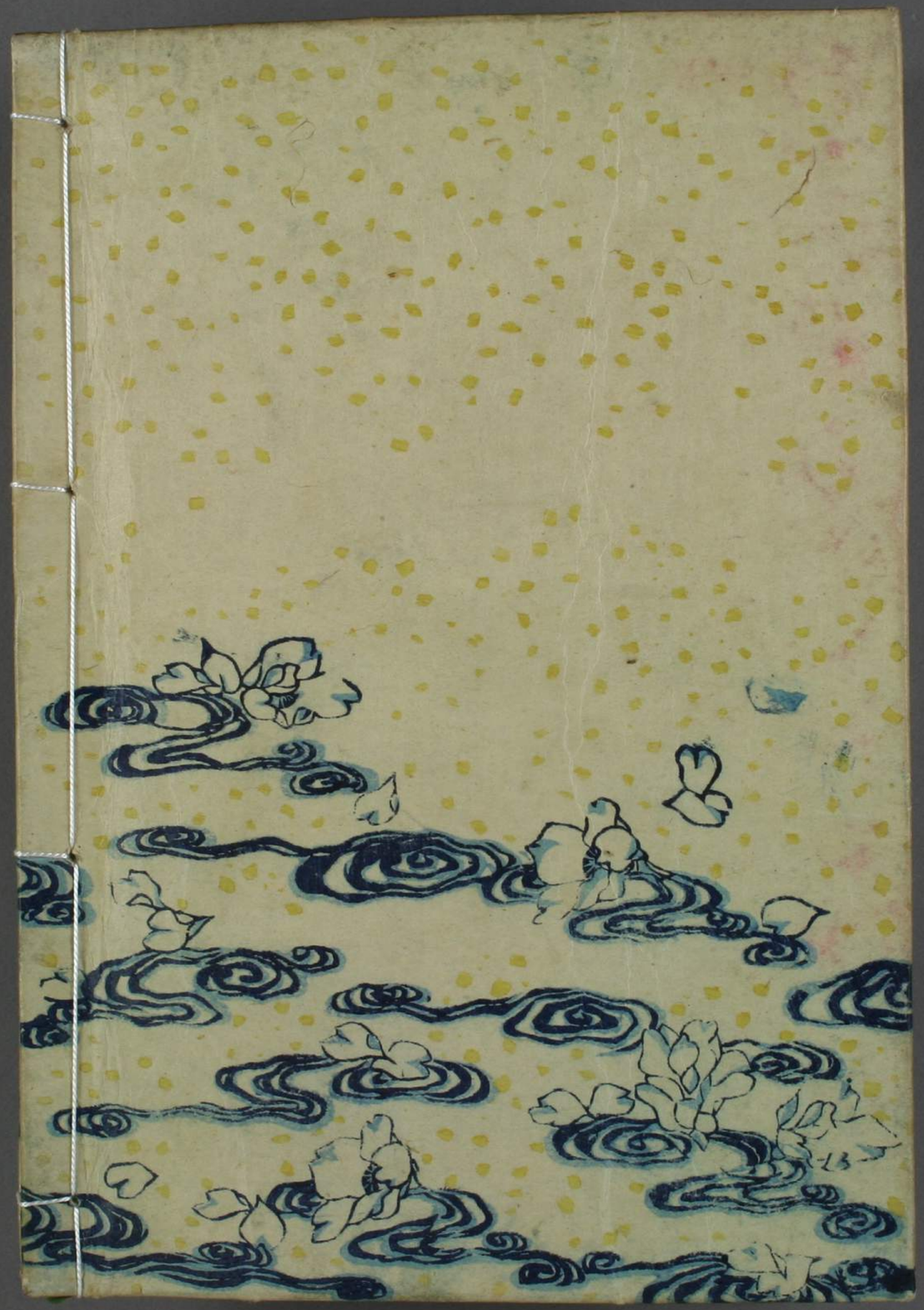
これを餘殃とぞ云へる。方僅義滿が世に立て。南北一統をと云へども。是に一統をば
はかるべき那人權詐の癖なれば。ゆゆしき二種の神器を奪復さんと思ひたるに南帝を
給はりて。和順に及ばざるれば這後とても世に又乱を。その内心を覘へば空空寂寂の業
異なるべきは是衣冠の罪人なるかな那身を鍾る時運を乗じて。五六十年乱れる世を理
めたりけれども驕恣にして。礼節を疎ろにとぞ。その身二十七歳の時相國たるんと
請禀せしに平清盛の外その例なきと。輒く勅許なりしかば義滿怒罵りて。
らんにせんとぞ。公家の御所を送るべく柳へて我身みづから國王を做昇り斯波細川
畠山仁を其家清花を做さんと其折思ひ知りぬべしと。頻りに焦燥たりければ朝議
これを避易して勅許あらんと。驕慢かくの如くなれば。親族譜第を無きが
陽には靡き從へども。陰には各々鬼胎を抱く。野心なれば。鎌倉の管領
足利氏滿その子滿兼に至りても世を謀らんと思ひかども。短命にして事成ざりき。

然れども山名大内が兵乱蕭墻の内より起りて。危ふしと討滅せしに幸ひにして免れ
たる。上は天子を敬ひまつるべき下はその子義持と不和にして。三郎の義嗣をのみ愛し
たる。後の患ひをはかるべきに。只一家のみ。その世の安危を知られず。却第一に不
忠不義は我大皇國の例なり。外邦に臣と倡へ明の成祖の冊封を受く。日本國王に
封ぜられしを一期の栄と思ひ。大辟無状萬死に當たる這宅の不義は忍ぶとも。
南帝を給はりまつる。誓言に背く一條と明の冊封を受たる是國體に係る
処。歴然として。饒恣なる縱宿怨あるべきとも。天に替りて道を行ひその非を正
さんのみなるに況や君父の讐敵なる。年来和女郎が數寄なる欲望情願道
理に稱ひて我辨論を惜まんに。順逆の理を解諦せしに。剣使に義を示さん
與へ宿望成就は今宵にあり。先に邪念を祛け。徐に准備をせよかしと言
詳に諭さる。理論に姑麿姫奮雄十倍勇む心を推鎮めて。理非明辨なる

トた自他の得失仇ゐりとそも他ゐ理あり。我ゐ理ゐくゐ賊ゐる。仇ゐ〜ぎとも義満ゐ。
如ゐ罪を正さべ〜と宣ゐるゑ剣俠の要領ゐてゑ結るめれ快北山ゐ赴ゐて二世の
怨を雪めてん許さゆゑと只管ゐ惰ゐを霽時と推禁めて寃家ゑを滅家
大臣數ゐゐも必礼ゐり儀あり我衣ゐ更めて宜く弓箭を携ふべ〜とゐ面個の
仙女童ヨヌ豆と知上端ゐゐろゐ〜奥ゐりて来る肱甲臑肩絅鎧戦襲大刀
七首草鞋も倶ゐ姑麿ゐ姫ゐ卒と薦ゐ六種の戦服姑摩姫い恭〜く受合ゐり
退ゐく。身装〜と立ゐれば九六媛い准備の弓箭を左右ゐ合ゐりあゐくと姑麿
姫と又召近着て這個弓箭い我贐ゐとれを和女郎ゐまゐ〜せん就中這征箭い
往る建武二年乙亥の冬十一月逆臣足利ゐる氏が鎌倉ゐ在りて謀反の折箱根
竹下ゐ欺所ゐ官軍を拒ん與ゐ服ゐる上掩の尖箭と是則他ゐ本心猿鳥ゐ虐ゐ
見ゐと。朝廷ゐりと雪たりける。支の剏の東西ゐれば和女郎今亦這箭とりそその

孫義満と射ゐ仕さば是返矢の故実ゐ稱ん太古十剣振神の御代ゐ高皇産
ヨ火尊ゐる天稚彦ゐ賜り〜天鹿児弓天羽々矢ゐる天稚彦ゐ弓矢をもて死名
雉と射て斃せゐ。その矢雉の胸を洞達く。高皇産ヨ火尊の御座ゐ面前ゐるん
達ゐける。高皇産ヨ火尊ゐと御覧ゐるゐ鏃ゐ鮮血塗ゐ。ゐりてその矢を含ゐ
ぬひ〜。還〜擲ちゆ〜ゐ過ゐ天稚彦の胸前ゐ禹然と中く仰反倒れく
死ゐけり。是ゐり世の人返矢を怕ゐとゐ縁故神代紀ゐ見ゐ。世ゐ是流
季ゐ泊ぶとへども今も足利尊氏が官軍を射ゐ征矢を返〜く。そゐ孫城
射ゐ仆〜ゐべ含ゐも易ゐ天の冥罰ゐれゐ優ゐ東西ゐんや。六十餘年れ
昔ゐり。新田楠西家の子孫の縁ゐほのゐ授んゐ。末然を察〜く藏
措ゐ我ゐ素懐を遂ゐ。卒々とりひゐ〜遞與ゐ弓箭を姑麿
姫い受合ゐりち戴ゐく。莞爾と笑く。小脇ゐ引着送ゐ方ゐれん諭〜

殊更に這恩貺へ沿々かりけは怨と復し矢天の羽々矢も外るゝ神の冥助と師の御庇ゆゑ宿意を果さゝ瞬く間程なくかゝりまろうてんと応て立と九六媛へ亦復霊妙時と推禁めゝ京の北る義満の金閣まぐい逆さけに初て也く旅るに飛行の術を沿うとも指南わゝぎい迷やせん然べ亦這香煙を路の道寸引せよ那里に到るゝ雖に遇ゞ名告被ゝ射ゝ仆さとも身に傷着ぎ五臓を破るゝ剣術の妙其首に在りその折人々知ぎもあれ速に逃ゝ還に住とも這旨を忘るゝと誨ゝ更に焼占は香の煙のゝち靡く方を御道寸に姑摩姫ゝ告別しつゝ鉄びを演に暇も夏の日の暮ぬ程に身を跳らゝゝ忽地ゝえぎるりけり畢竟這日姑摩姫ゞ金閣に赴て君父の怨を復さや否やそゝ次の巻に解分は聴給へ。

俠客傳第三集巻之一終

○藝三堂印刷